

このうち「分家慣行調査」には、喜多野清一や米林富男、及川宏ら東大社会学科出身の若き研究者も参加し、また同調査との関連で参加者独自の現地調査も相次いで行われ、研究成果も精力的に発表された（喜多野による山梨県北都留郡欄原村大垣外での「一九三七—三八年の調査」と、『民族学年報』第一卷、一九四〇年に所収の論文「甲州山村の同族組織と親方子方慣行」がそれを代表しよう）。

ところで、大垣外調査には、小川徹、北山正邦、渡辺万寿太郎ら

と共に、当時まだ東大社会学部に入学して間もない頃の関清秀も参加していた。そして関は後に、そこでの経験を踏まえて、青森県中津軽郡西日屋村大秋での調査を単独で実施し、その成果を卒論にま

山間集落における家族・地域生活の変容と連続性

——山梨県旧檍原村大垣外と青森県西日屋村大秋の五十年——

後藤 範章

一九三〇年代後半は、村落社会研究史上、そして「日本農村社会学」の形成にとって、実にエポックをなす時期であった。「同族団研究の二つの起点」（中野卓）と評される戸田貞二・鈴木栄太郎らの「分家慣行調査」（一九三五—三七年）と有賀壽左衛門らの「石神村調査」（一九三五—三七年）、あるいはまた柳田国男らの「山村生活調査」（一九三四—三六年）、等々の大がかりな調査が、ほぼ同じくして実施されている。

この五〇年の間には、大垣外では、一九六一年に閑散吾らの指導の基に東京学芸大学民俗学研究会（「大垣外の民俗」一九六二年、尚、この調査には喜多野・小川・住谷一彦・余田博通・服部治則・光吉利之らも参加）が、一九八四年には池岡義孝ら早稲田大学社会学研究室（『大垣外の歴史と人生』一九八五年）が、一方大秋では、

一九五五年に笛森秀雄ら（成果の一部は、鈴木栄太郎『都市社会学

原理』一九五七年、の中で取り上げられている)が、それぞれ調査を実施し、報告もなされている。また、我々の調査報告も、大垣外については中村利昌・後藤、大秋については関・久門道利によつてまとめられ(日本大学総合科学研究所編『現代家族の生活行動に関する個別調査報告書』一九九一年)、後藤による大垣外の事例分析を核とした論文「日本社会における家族・地域生活の、原型、とその変容過程」(同上研究所編『現代日本文化と家族』一九九二年所収)も発表済みである。

本報告は、大垣外と大秋を事例に、これらの研究成果と実証データを用いて、山間集落における家族・地域生活のあり方を、戦前にまで遡って捉え、今日に至る道筋を系時的に検証しようとするものである。

(日本大学)